小樽 済生会小樽病診連携カンファレンス開催

放射線治療を学ぶ

済生会小樽病院（和田一卓郎院長・258床）は7日、放射線治療をテーマとした小樽病診連携カンファレンスを開催した。

小樽市内の病院や開業医らでつくる小樽病診連携グループは、道の在宅医療推進事業の支援を受け、医療・介護・福祉関係者のレベルアップを目指して取り組んでいる。

5回目となる今回は、北海道がんセンターの小野寺俊輔放射線治療科医長＝写真＝が「放射線治療依頼のタイミングーその有用性と欠点について」を特別講演した。

有痛性転移性骨腫瘍に対する放射線治療紹介のタイミングや緊急照射の適応、出血制御に用いる放射線治療の実際などを解説。

多くのがんに伴う疼痛などの改善にも有効で、緩和医療における重要な選択肢となっており、「痛みや麻痺は速やかな相談を。また放射線治療の効果発現には時間がかかるため、治療中、治療後の効果発現までの間は支持療法が重要」と訴えた。